

天台止観における善悪

——第四業相境を中心として——

荒 槇 純 隆

(叡 山 学 院)

『摩訶止観』の序文に止観の伝承について、

天台傳_ニ南岳三種止観。一漸次。二不定。三圓頓。皆是大乘。俱緣_ニ實相_一同名_ニ止観_一。(大正4516止観一章安縁起)とある。天台大師智顗(538～597)は、漸次、不定、円頓の三種の止観を南岳慧思(515～577)より伝えた。三種の止観(漸次・不定・円頓)とは『次第禪門』『六妙法門』『摩訶止観』にあたる。そこに説かれる法門はみな大乘であり、ともに実相を縁じ同じく止観と名づけると述べられている。また、南岳慧思より伝えたという一方で、とくに『摩訶止観』は「天台智者説己心中所行法門」⁽¹⁾とも云われる。つまり『摩訶止観』は天台大師が己心中に行ずる所の法門を説かれたものである。それは、実相を抛り所としたものであるから、自己の内証ともいえる。内証とは己心の悟りであり実相にはかならない。ここでは、その実相を体とし、それが現れた姿とも云える「相」に注目して善悪を考えてみたい。つまり、ここであるところの相とは——己心中とあることから——心に現れたもの、あるいは写しだされたものである。そこに現れた相において善悪というものがどのように捉えられているのか。この論文においては、

その相に注目して天台止観における善惡を考察してみたい。

一

先ず、天台大師智顗（以下智顗とする）が南岳慧思のもとで法華を修したのは二十三歳、『隋天台智者大師別伝』には、

初獲_二頂拜_一。思曰。昔日靈山同聽_レ法華。宿緣所_レ追今復來矣。卽示_二普賢道場爲說_一四安樂行。（中略）經_二二七日_一誦_二至藥王品諸佛同讚是眞精進是名眞法供養_一。到此一句_一身心豁然寂而入定。持因_レ靜發照_二了法華_一。若_二高輝之臨_一幽谷_一。達_二諸法相_一似_二長風之游_一太虛_一。（中略）

觀慧無礙禪門不_レ壅。宿習開發煥若_二華敷_一矣。（大正50, 191c-192a）

とある。これを大蘇開悟というが、このなかに相という言葉がみられる。つまり「持（初旋陀羅尼）は静に因りて發し、法華を照了すること、高くかがやき、幽谷に臨むがごとく、諸法の相に達すること、長風の大虚に遊ぶに似たり」とあるなかの「諸法の相に達した」という相である。この諸法の相とは一体どのようなことを云っているのだろうか。ちなみに、相という言葉は慧思伝にも見られる。『統高僧伝』卷第十七、陳南岳衡山釈慧思伝二には、

始三七日發_二少靜觀_一。見_二一生來善惡業相_一。因_レ此驚嗟倍復勇猛。遂動_二八觸_一發_二本初禪_一。自_レ此禪障忽起。四肢緩弱不_レ勝_二行步_一。身不_レ隨_レ心。卽自觀察。我今病者皆從_レ業生。業由_レ心起。本無_二外境_一。反見_二心源_一業非_レ可_レ得。身如_二雲影_一相有體空。如_レ是觀已。顛倒想滅。心性清淨。所_レ苦消除。又發_二空定_一心境廓然。夏竟受_レ威慨_レ無_二所獲_一。自傷_二昏沈_一。生爲_二空過_一深懷_二慚愧_一。放_レ身倚_レ壁。背未_レ至間霍爾開悟。法華三昧大乘法門一念明達。

(大正 20, 563a)

とある。坐禅して、三七日に少静観を發した。そこで一生の善惡の業相を見て驚き、勇猛に精進した。ついに、八触（動触、重触、輕触、冷触、暖触等）が動いて、初禅を發得した。……その後、法華三昧、大乘法門に達したとある。慧思は、少静観によって、一生の善惡の業相を見たのである。天台は諸法の相に達し、慧思は一生の善惡の業相を見るところから、この時点では意味が少し異なるが、共通することはいずれも静観によって相がおこっているということである。

ところで、『法華經』には実に多くの相が述べられている。例えば、諸法実相、世間相常住、三十二相八十種好、寂滅相、真実相、言辞相、白毫相、罪福相、解脫相離相滅相、師子相、涅槃相、百福相、三界之相、信解相、喜相、人相、衰老相、惡相、禽獸鳴相、鼻相、百福莊嚴相、舌相、大人相、妙相などがあり、なによりもまた、相とは「十如是」の第一にあげられている。何故、相が最初にあげられるのであろうか。十如是においても、自然に考えつくところでは、体つまり本質があり、その根がもとになって、あるいは、性があり、それによって相があらわれるはずである。つまり、体（本根、本質）、性（本性に見られない）、相（姿）となるのが普通ではないのか。それが、相から始まるのは、なにか意味があるのではないか。

相とは一般には、内的なものに対する外的なすがた、つまり、眼に見えるもの、あるいは坐中にある心は心に写し出されるものである。これは行をするものにとっては、最も認めやすいものであると考えられる。今『法華經』の中にでてくる相とつくことをあげたが、そのなかの提婆達多品にある、

深達罪福相。遍照於十方。（大正 9, 35b）

という偈文について、『法華文句』には、

今偈深達ニ無罪無福入ニ一實相。名爲深達也。十方即十法界。同以實慧朗之。故言遍照也。

（大正 34, 117a）

とある。深達とは無罪無福に深く達して一実相に入ることであり、十方とは十法界を云い、同じく実恵をもってこれを朗にすることから遍照と言うとある。つまり、罪福の相を明らかにしていくと、罪福がもはや罪福ではなくなっていくのである。『摩訶止観』のなか「正修止観」には、その罪福の相について、

業相爲法界者。業是行陰。法華云。深達罪福相。遍照於十方。微妙淨法身具相三十二。（大正 46, 49c）

と説かれている。ここにおいて、智顗は、業を行陰ととらえ、その相とは法華に説かれるところの罪福の相であると説く。さらに業相境では、

罪福相祇是善惡業耳（大正 46, 112a）

と、罪福の相とはまさに善惡業であると断定している。この点では、先に述べた慧思と一致している。つまり、相を業と、それも善惡の業相として捉えていることである。

その善惡の相に深く達することによって、遍く十方を照らす、それは全く十界の善惡の相を「悟りの智」でもって見ることであり、それが『法華経』に説く一乗の法に入ることであると思われる。相を明らかにすることが一乗の法に入ることであるのである。しかし、その罪福、つまり善惡の相を業としてとらえていることから、その相には過去から現在、そして未来へと続いているわけで、そこには業の問題が関わってくると考えられる。智顗は善惡の業相についてどのように捉えていたのかという問題である。そこで次に、この『摩訶止観』に説かれる業相境を中心に善惡

の業相を見てみたい。

二

『摩訶止観』十大章のなか正修章の第四に説く業相境は、因縁、堯相、料簡、止観（十乘観法）と四にわけて業相を明かしている。

まず、止観における業の定義については、第七正修止観に「業とは行陰である⁽²⁾」と説かれる。行陰とは五陰、つまり色受想行識の行陰である。行陰とは意志などの心の作用、つまり、いかり、貪りなどの善惡に関する一切の心の作用、もっと簡単に云うならば、動くことによって生じるものである。ちなみに心については「識陰は心これなり⁽³⁾」とある。これらは止観を修することによって善惡が動かされ、相となって現れる。示現されるのであるが、それについて、先ず、序文に、

第四觀業相境^二者。行人無量劫來所作善惡諸業。或已受報或未^レ受報。若平平運心相則不^レ現。今修止觀能動^三諸業。故善惡相現。疑者言。大乘平等何相可^レ論。今言不^レ爾。祇由^三平等鏡淨^二故諸業像現。光明云。將證^三十地相皆前現。阿含云。將證^三初果^二八十八頭蛇於^三其前^二死。大小兩乘相文甚多。又法華云。深達^三罪福相^二遍照^三於十方。罪福祇是善惡業耳。淨名云。於^三第一義^二而不^レ動善能分^三別諸法相^二。故汝難非也。（大正46, 111c）

とある。無量劫から作ってきた善惡の無量の業は、その報を受けたものもあれば、いまだに報を受けないものもある。これらの相は平平の運心⁽⁴⁾では現われることがないのであるが、いま、止観を修することによって、それらの業を動じて（動かして）善惡の相が現われると説かれる。これは、相の生起する原因について述べている。また、これ

らの相を説く理由を『阿含經』や『金光明經』、つまり大乘・小乗の經典によって、相が説かれていることをあげ傍証としている。『法華經』においても同様に、「深達罪福相。遍照於十方」をだして、更に「罪福相祇是善惡業耳」と説き、業を善と惡の二つに規定している。業が善惡に規定されるのは、最初に述べた智顗が南岳慧思から伝えた三種止観のなか、漸次止観とされる『釈禪波羅蜜次第法門』（『次第禪門』）、これは、南岳慧思から別れてから間もなく説かれたものであるが、その中の内方便にある「驗善惡根性」には次のようにある。

第二明驗善惡根性者。行人既能善修止門。息諸亂想。則其心澄靜。以心靜故。宿世善根。自然開發。若無善者。則發諸惡法。故經（涅槃經）云「先以定動。後以智拔」。止爲初門。善惡二事之中。必有其一。行者應當明識其相。取捨之間不乖正道。故須分別。（大正46, 54a）

と、この善惡の相が現われるのは坐中であって、先ず止門を修し、諸々の亂想が息み、心が澄み靜かなる状態になり、その心靜かなる故に、宿世善根が自然開發するのであると説かれる。ここに出るところの靜とは靜慮ジヨウつまり禪定の境地という意味であろうと考えられる。

また、もし善ではなくて、惡が発した場合については、『涅槃經』第二十九にいう「先に定をもって動ず。後に智をもつて抜く⁽⁵⁾」を引いている。そしてなによりも注目したいのは、その相とは必ず善惡のいずれか一つであるとされることがある。その相を明める間、つまり善か惡かを分別する間は、正道に乖くことはない。つまり、現われた相を明らかに分別することを説く。ここで、止についても少しみるならば、同じく『次第禪門』第三之上に、

第二明下修禪波羅蜜内方便。一先明止門……（中略）……今於内方便中。以止爲初門者。一切禪定功德。皆因制心息亂而發。故經云。制之一處。無事不辦。止爲初門。則意在_レ此也。（大正46, 491c）

とある。ここにいう「經に云わく」とは『ブツユイキヨウギヨウ仏遺教經』である。「之を一処に制すれば、事としてそなわざるはなし」⁽⁶⁾。之とは心を指す。この心を制すれば、すべてがそなわる、または、明らかにされる、つまり、心を知れば、他の一切が知れる。という意味である。『摩訶止観』においては、

但專繫緣法界。一念法界。繫緣是止。一念是觀。(大正 46, 11b)

と定義される。止は念を法界に繋けること、観は念を法界と一にすること。この二を合して止観ということから、この「制之一処」は止であり、静であり、「無事不辨」は明瞭になるということから観であり、明であるといえる。つまり止を最初に説くことの意味は一心を制する一心が一心を明瞭に觀察することを確認するためであると、とることが出来る。まさに、意はここにあるといえる。止観においてはその方法として四種三昧十乘観法が説かれ、そのてですけとして二十五方便がある。

三

次に、業相について注目してみる。『摩訶止観』には、

明業相爲四。一相發因緣。二正發相。三料簡。四止觀。(大正 46, 112a)

と四種に分類し、第一にあげる因縁には、

因縁者。有内_レ有_レ外。内者。止観研_レ心。心漸明淨照_二諸善惡_一。或可_ニ以_レ止_レ止_レ惡惡方欲_レ滅。以_レ觀觀_レ善善方欲_レ生。或可_ニ以_レ止_レ止_レ惡惡因_レ靜生。以_レ觀觀_レ善善因_レ觀滅。無量業相出_二止觀中_一。如_二鏡被_レ磨萬像自現_一。

(大正 46, 112a)

と説明される。「止観によって心をみがき、心の乱れがようやく修まり明淨になった状態において、この善惡の相があらわれることを知る。止をもつて惡を止めるに、惡はまさに滅しようとし、觀をもつて善を觀るに、善はまさに生じようとするところがある。或いは、止をもつて惡を止めるに、惡は靜によって生じ、觀をもつて善を觀るに、善は觀によって滅することを。無量の業相が止觀中に現われる」と、これは六祖湛然（711-782）の『弘決』によれば、「この善惡の生滅は、但止觀によって生滅の相を見るのであって、止觀が善惡をして生滅させるということではない」と述べている。続いて、止觀には鏡の譬を出している。つまり、鏡が研かれて万像が写し込まれたようなものであると説明される。ここで注意しておきたいのは、善であるから、或いは、惡であるからという取捨をしていないということである。では、この心の乱れがようやく修まり明淨になった状態とはどのような状態なのか。それは、村中祐生師の説によれば、禪定に入るまえ、つまり、欲界定（四禪のうち第一の初禪にあたる）の位次に等しいところと考えられるとある。この状態にあつて、さらに行を成すにはどうしたらよか、止觀には

今但研心止觀。令業謝行成。一心取道。何用曲辨相耶。（大正46, 112a）
とある。「いまは但、止觀によって心を研ぎ、業謝し、行を成ぜしむることが目的である」とし、ここで、業については、業謝といっている。

この業謝とは、特に謝の意味は「去る」「立ちのく」「やめる」「すてる」「はなつ」「縁を切る」などの意味であることから、業謝とは業をきる、または、業を捨てて、その状態を指す。つまり、止觀の止にあたるといえる。また、業は身・口・意にわたることから、思いも業におさまる。俗な言葉に「思い切る」という言葉があるが、まさにその状態にあつて、行を成ぜしむることを目的としている。行を成就するために一心に道を取ることが要求されている。

したがって先に述べたように心を制すること、それは、先ず、静をおこすことが基本となる。湛然の弟子である梁肅(753~793)は『略止観』のなかで「心を調べ、理に入り、観力が成就することによって、業はおのずと謝すべし」と述べている。つまり止観を修していくことによって業は自ら去っていくということであろう。止観においては「何用ニ曲辨ヲ相耶」と、業相を詳らかに弁じることとは目的ではないと説明される所以である。恐らくそれを説明するため次に業相の起ることについて述べるのであると考えられる。

四

では、その業相が起ることについて智顗は六あるとする。

一 報果相現。(1 報果の相が現る)

二 習因相現。(2 習因の相が現る)

三 報前現習後現。(3 報が前に現れ、習が後に現る)

四 習前現報後現。(4 習が前に現れ、報が後に現る)

五 習報俱時現。(5 習報が俱に現る)

六 前後不定。(6 前後不定)

諸業現時参差萬品。識此六意分別無謬。

と、諸の業が現れる時は、参差(たがいちがい／入り交じって)として万品であり、この六意を識れば分別に謬なし。

これらの六項について、最初に報果ではなく、習因から説明される。

云何名_レ習因習果。阿毘曇人云。習因は自分因。習果は依果。又習名_レ習續。自分種子相生。

後念心起習續_ニ於前。前念爲_レ因後念爲_レ果。此義通_ニ三性。論家但在_ニ善惡_ニ無記無_ニ習續_ニ也。

報因報果者。此就_ニ異世。前習因習果皆名_ニ報因。此因牽_ニ來果_ニ故以_レ報目_レ之。名爲_ニ報因。

後受_ニ五道身_ニ即是報果也。

就_ニ今果報身上_ニ復起_ニ善惡習續。習因習果總望_ニ前世_ニ此習續是果。若望_ニ後世_ニ此習續是因。

數家明_ニ報得_ニ鵠雀身_ニ是報果。多姪是習果。論家鵠身及多姪俱是報果。姪由_レ貪起。貪是習果。

又今生煩惱起名_ニ習因。成_レ業即報因。後生起_ニ煩惱_ニ名_ニ習果。苦痛名_ニ報果。

若坐禪中但見_ニ諸相。此名_ニ報果相現。由_ニ昔因_ニ故亦得_レ言_ニ報因。又能起因牽_ニ於後報_ニ互受_ニ名耳。

今但判爲_ニ報果相_ニ也。

若於坐中不_レ見_ニ諸相。鬱爾起_レ心是發_ニ習因_ニ能牽_ニ來果_ニ故。亦得_レ名_ニ習果_ニ酬_ニ昔因_ニ故。互受_ニ其名。

今但判爲_ニ習因_ニ也。善相衆多且約_ニ六度_ニ……（大正 46, 112a）

とある。「云何なるを習因習果と名づける」ここでは、毘曇・論家・數家など説によつて善惡の業を習因、習果と置き換えて説かれている。したがつてここでは習因は善惡であるといえる。この善惡の習因について「習因とは自分の因であり、習続の意味がある。自分の種子が生じ、後に起る心に受け継がれていく。前の念が因であり、後の念が果である」とし、或いは、「今生に煩惱起るを習因と名づけ、それが業となるのを報因とする」今を基準にすれば、習因とは今において起こした煩惱をいうのであるが、とくに、諸相が現れず鬱爾として起した心に習因がおこるとする。

いずれも、智顗はこれを一念の業としてとらえていくのである。この習因について、『法華文句』には譬喩をもって説明している。それをみると、

今謂習因應譬種子受潤增長。而土地山川雖有受潤。闕於種子增長二義。（中略）今以大千世界。譬衆生世間。山川谿谷土地。譬五陰世間。世界無別法。爲山川谿谷土地所成。衆生無別法。爲五陰所成。土地既通譬識陰。山川谿谷譬四陰。能依草木雖依土地等。土地等非即草木。草木質幹（体軀、からだ、をいう）但名草木。草木種子更無別名。但取能生之功名種子。所生質幹名草木。皆植根於地。地則本也。內合習因習果。雖依五陰。五陰非即因果。要依於陰得有習因。增長成辦名習果。果因依陰而起。則山川土地譬成。草木種子受潤增長譬悉成也。（大正 34. 922a 葉草喩品）

これは先にのべたように、習因とは現在おこるところの善惡であるが、それが、増長するをもって習果と名づけている。たとえとして、草木（つまり善惡）の種が成長して草木の形となるようなものであり、草木以外別の名があるわけではなく、しかもそれは大地（つまり心）に根を垂れている。その大地が本であり、それは五陰のなかに習因となる要素——とでもいうのか——それが含まれているとされる。恐らく、このとらえ方が天台の具の思想へと展開していくのであろうと思われる。とにかく、心には習因つまり善惡となる要素がふくまれているのである。止観には報果については異世につくとある。また、現世に煩惱おこるを習因、業が成じるのを報因、来世に苦を受けるのを報果としている。

止観において見るところの相とは、報果の相であり、又は、鬱爾としておこすところ習因である。具体的には、善の相については六度、惡の相については六蔽において説かれていく。

五

ここまで因縁・発相とみてきたが、ここまですべてを整理すると、南岳慧思・天台大師智顗ともに相に達することによって悟りに至ったことから、相を手がかりとして善悪を見てきた。相とは善悪の業相である。その相を説明する方法として、心を認識する対象とした。心には善悪を生起し生長させる要素を含んでいる。それは、静（止観の止にあたる）なる状態によって心に現われる。そして、そこに現れた善悪を取捨するのではなく、明らかに観ることが説かれる。つまり、心を止観に研く、或は一心に道をとるという意味はそこにあるのである。従って、止観では善悪の相を詳しく述べることは目的ではないと述べられる。謬なく見ることができれば、もはやそこには迷いというものはないのである。

このように止観における善悪の業相についてみてきたが、『摩訶止観』ではこの後、料簡、十乘観法と説かれている。紙数の都合でここで筆を置くが、現代社会に次々におこる社会問題は複雑多様化している。その根本の原因となるのは、やはり心の問題にあるのではないだろうか、心のケアということが云われるのもその表れであると思われる。それらは心を解明していく事によって、解決されるであらうし、更には、救いへとつながると思われる。そのことからこの天台止観のもつ意義は、更におおきいものと思われる。

注

- (1) 大正 46, 1b
- (2) 大正 46, 49c

- (3) 大正 46, 52b
- (4) 平平運心について、『天台学概論』には「而るに平素通常の心境」(二八二頁)とある。梁肅の『略止観』には「居常」(つねに、ふだん、平成、道を守って変らぬ等)という言葉で説かれている。また、村中祐生氏は「ここにある『平平運心』は、先の『若不照不覚紛馳』と同じく、禪定においてある性情を超えた段階のあることを前提として説き出している。それは、すなわち、「豁爾心地一分開明」という欲界定の位次に等しいところと考えられる。」(村中祐生『天台観門の基調』二六一頁)と述べている。
- (5) 大正 12, 793c
- (6) 大正 12, 1111a
- (7) 『止観輔行伝弘決』大正 46, 403a
- (8) 『天台観門の基調』村中祐生、二六一頁
- (9) 『刪定止観』干統二一四、九十四丁左下

